筑波学院大学紀要第15集　161 ～ 174 ページ　　2020年

＜研究ノート＞

中国・四国地方の傘を出す盆踊り

坂本　　要*

The Parasol Rites in Bon Dance No.3

Kaname SAKAMOTO *

承前

この報告は「遠賀川流域・玄海灘の傘を立てる盆踊り」「宇佐地域及び大分・宮崎県境の傘の出る盆踊り」に次ぐ報告である[1)]。前二著で報告した傘は傘ブクと差し傘が混在している地区であった。傘ブクは京都祇園祭りの傘と鉾が重なったとされる傘ホコが訛って傘ブクとされる傘で、祇園祭以外にも博多どんたくや長崎くんちをはじめ、風流系の祭礼に多く出される。一方差し傘は高貴な人や僧や神官・巫女などに差しかけられたもので、身守り・身祓いの吊り下げ物があるものが多い[2)]。京都祇園祭では傘ブクとは別に子どもが肩車され、傘を差しかけられている見物人の一行が描かれている[3)]。

また盆踊りの音頭取りが唐傘を手に持つ事例が見られる。風流系の踊りで風流傘の下の歌い手の入る事例もあるので[4)]、その延長とも取れるが、発生についてはまだ不明で事例を集めている段階である。この傘を出す盆踊りは「口説き」系の盆踊りに多く見られ、分布も関西以西の西日本と新潟県あたりまでの日本海沿岸にある。最も多く見られるのは大分県・福岡県で、すでに前二著で報告した。第三報告である今回は地域も広く、前二報告の様に地域の悉皆調査はできていないので、調査地点のポイントごとの報告になる。発生は瀬戸内海東部と思われるが、山陰・山陽・四国と事例を述べ、伝播を考えて見たい。

報告には傘は出さないが関連が窺える地点（兵庫県赤穂市坂越（さこし）、徳島県つるぎ市貞光町木屋（こや）・川見と牟岐町由岐）を入れた。また今回の地域外である新潟県新潟市間瀬（ませ）も参考に入れた。

1、鳥取県

＜鳥取市青谷町山根＞

鳥取市西部の旧青谷町日置地区と隣接する旧鹿野町河内（こうち）に傘を出す盆踊りがある。

日置地区は８月14日山根厳正寺境内、15日河原の四ツ堂、16日早牛蓮華寺で８時半ころから盆踊りを行う。厳正寺は浄土真宗で妙好人因幡の源左（げんざ）の出たところとして有名で柳宗悦もこの寺をたびたび訪れている。盆踊りは臼を逆さにして重ね、その上に音頭取りが立ち、高さ３メートルから５メートルほどのボンデンを立て、唐傘を手にしながら音頭を取る。ボンデンとは孟宗竹の先に御幣を付けた

＊　筑波学院大学名誉教授、Tsukuba Gakuin University

ものである。ボンデン渡しと言って唄のうまい人に贈られる。

臼は一基から五基ほどを積み重ねる。山根厳正寺では寺本堂の縁の下にひび割れ臼を保管し、盆踊りの日に四基の臼を二段に積み上げる。莫蓙を敷き、臼を積み上げ、ボンデンを臼に縛って立てる。音頭取りは一段目の臼の上に番傘を持って唄う。ボンデンの先には百枚ほどの切紙が付けられている。葬式の時にもボンデンを立てるという。厳正寺のボンデンは８メートルほどもある。臼にお茶や酒を載せ、のどを潤しながら音頭を取る。

踊りは「さんこ」「博多」「はねそ」などがあるが「はねそ」は「跳ねそうろう」と言って前足を出して踊る。雨乞いのため天に向かって跳ねあげるという。傘を出すのも雨乞いのためとされる。「はねそ」は鹿野町の亀井踊りが元と言われる。音頭は「一の谷嫩（ふたば）軍記」の「熊谷陣屋の段」で熊谷直実が法然上人に会って回心したことに因んでいる。莫蓙に置かれた太鼓で音頭を取る。（写真１・２）

（2010年調査）

＜鳥取市鹿野（しかの）町河内（こうち）＞

鹿野町河内では８月17日に光輪寺前の広場に櫓を組みその上で破れ傘を手に音頭を取る。山根と同じく「一の谷嫩（ふたば）軍記」であるが、踊りは腰を落とす踊りである。（写真３）

早牛（はやうじ）の昭和38年（1963）の写真４を掲げる。河内と同じく破れ傘である。臼とボンデンの棹が見える。はねそ踊りは気高郡一帯に、ボンデンは鳥取県東部に多いとされる。傘や臼をだすのは日置川沿いに分布する[5)]。

なお鳥取県には長柄の傘をくるくる回す「因幡の傘踊り」が有名で鳥取市を中心にひろまっているが、これは明治39年（1906）に高岡の山本徳次郎の考案により始まるとされる。盆の踊り寄せに踊られることが多く隊列を組むもので、傘を出す盆踊りの輪踊りとは別であろう。　（2010年調査）

2、島根県

＜邑智郡邑南町（おおちおうなん）（旧石見（いわみ）町）日貫（ひぬい）＞

この地区は大元神楽で有名なところであるが、盆には傘を出す盆踊りが多かった。日貫では８月14日に新盆の家を廻り、15日は公民館で慰霊の盆踊りを踊った。宝光寺（浄土宗）に地蔵堂があり、８月23日の地蔵盆に宝光寺の庭で盆踊りを行う。櫓に替わり小型トラックの荷台に音頭取りが立ち、傘を以って音頭を取る。（写真５）太鼓もなく音頭取りの唄だけで踊るが途中から寺の太鼓や鉦・繞鉢の鳴り物を持って囃す。音頭は「はんや踊り」と口説きである。「はんや」は囃子言葉で七七七五の句がつく。「ハンヤー　はんやにがたの　川真ん中に　あやめ咲くとはしおらしや」「盆の十五日に　踊らぬ者は　猫か鼠か　空飛ぶ鳥か」等文句は二十種ほどある。

口説きは「平井権八」「鈴木主水」「志賀団七」「佐倉宗五郎」「三さ口説き」「お吉口説き」「おつや口説き」「教訓色は口説き」「中将姫雪責め口説き」「おせき口説き」がある。近年は「平井権八」が主である。この口説きには「さてもさてさて　さてその如何　さても東西鎮まり給え」の前唄「くどき文句は数々あれど次の先生がお出での様子」で次の唄い手に傘を渡す。受けては「先の先生にこの傘貰ろた　私ゃ先生のように　ようにはいかぬ」で傘を受け、口説きをつないでいく。『里の響き』として日貫の田唄・盆踊り唄集としてまとめられている[6)]。

島根県では聞き書きと『島根の民俗芸能』[7)]から江津市市山・大田市祖式・大田市琴ヶ浜・益田市匹見・益田市澄川・益田市道川に傘を出す盆踊りのあったことが分かる。

（2019年調査）

3、岡山県

＜真庭市落合町吉（よし）＞

岡山県北部の真庭市落合町・旧旭町（現美咲町）には念仏踊りが多くあった。その中で

も落合町吉の念仏踊りは有名で、大傘とか天蓋と言われる傘が出る。８月16日真言宗法福寺で行われる。寺庭に臼を逆さにして、これを支えに大傘を立てる。大傘には灯籠がつけられ紋付羽織の寺総代の読み手が臼の上に立つ。読み手は奉書を読み上げ、「何々様への念仏」という掛け声を掛ける。（写真６）脇に二人の音頭取り（調声ともいう）がハタキと幟を持ち念仏を唱える。サイハラという両端に切紙のついた２メートルほどの棒を持った二人が棒を打ち合わせながら踊る。（写真７）他にカンコという大太鼓を胸に付けた五人と鉦の五人が念仏に合わせて大傘の周りをまわる。サイハラの二人は棒を持って跳ねる[8]。（図１）この踊りは盆踊りではなく棒踊りを伴った風流踊り系の念仏踊りであり、その中心に傘が立てられていると考えられる。臼を伏せてその上に載るのは鳥取の例と共通している。同様の棒振りを伴う念仏踊りに旧旭町簗瀬の念仏踊りがあるが、臼や傘は出ない。　（2003年調査）

＜浅口市金光町佐方（さかた）＞

金光町佐方の諏訪神社で８月26日に行われる。かつては７月26日の諏訪神社のぼうぶら

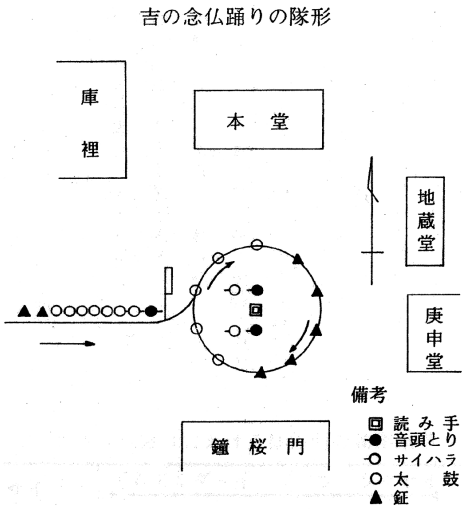


図１　落合町吉の念仏踊り図（『落合町史民俗編』より）

（かぼちゃ）祭りに行われた。盆には大光院の施餓鬼や各家を回った。26日神主による神事の後、境内に横三尺縦六尺のイッチョウ台（一畳台）を出し、その上に音頭取りと囃し手が上がり、その下で太鼓を叩く。（写真８）イッチョウ台は普段夕涼みに出す台である。

踊りは地踊り（ひがさき踊り）・合わせ踊り・組踊り・扇子踊りがあり、イッチョウ台のまわりを踊る。囃し手が音頭取りに傘を差しかける。「石堂丸」「八百屋お七」を口説くが、他に「絵本太功記尼崎の段」「義経千本桜」「忠臣蔵討ち入りの段」があった。音頭取りは文句を扇子に書き、「もろたもろた傘もろたもろたばかりじゃどうやらすまぬ」と受けて、終わると「ここらで扇子にかわりましょ」で次の音頭取りに渡す。ひがさき踊りの名については日傘を差すからとか、ひがたとは雨乞いのことであるとの説がある。（2010年調査）

＜笠岡市白石島＞

白石踊りは寿永２年（1183）の源氏と平家の水島の戦いの戦死者の霊を弔うことから始まったとされるが、白石島の開拓は元禄時代（1688～1704）以降でこの踊りが中世からのものであったとは言えない。『口説き集』[9]の冒頭にある「大和和讃」「賽の河原」の類が最初にあったとされる。『口説き集』は「兵庫口説き」を元としていて兵庫県赤穂市の坂（さ）越（ごし）や淡路島南の沼島（ぬしま）の唄本を参考にしたという話や、讃岐の金毘羅の浄瑠璃本を移して唄ったという話がある。踊りは塩飽本島（しあくほんじま）の念仏踊りの影響があるとされる。

古くは旧７月13日から16日まで新盆の家を回った。新盆の家を回る時は手持ちの傘を持った。さらに17日は観音踊り・20日は大師踊り・23日は地蔵踊り・30日は八朔踊りと続き公民館で櫓を組んで踊った。昭和40年ころまで浄水場での雨乞い踊りがあった。昭和20年以降観光のため浜で踊るようになった。現在８月13日から16日に廻向踊りとして浜で行うが中央に大傘（だいがさ）を立て、音頭取りが入る。か

つては床几台を設けその上に立った。また太鼓は樽を逆さにして留め木の枠を設け、その上に載せた。踊りは男踊り・女踊り・奴踊り・二つ拍子（娘踊り）等十三種があるが、趣向を凝らし仮装姿で踊った。写真９は古い観光用のものであるが、趣を伝える。一つの囃子で各人が各様の振りで踊る。他に雨乞いの時に踊ったとされる。現在観光用のイベントなどで踊られる。

踊り口説きは「賽の河原」「山田の露」「揚巻助六　上下」「おはん長右衛門」「加賀のお菊」「石堂丸　上下」「那須の与一」「お梅伝治　上下」「七回忌」「たんばよさく」「阿波の鳴門」「おはつ徳兵　上下」「お夏清十郎　上下」があるが、これ以外にも浄瑠璃を題材にするものがあった。よく唄われるのは「石堂丸」「那須与一」「山田の露」などである。

塩飽本島の念仏踊りにも音頭取りが手傘を差す。（2010年調査）

4、兵庫県

＜洲本町由良（ゆら）＞

大正11年（1922）に書かれた稲垣伊作の『由良志稿』の「由良の盆踊り」に次のような記事がある。「音頭人は右手に傘、左手に白湯を持ちて、臼又は樽の上に立ち七七調数十句の世話物と口説き太鼓に合せて聴衆之を囃す、而して編笠優しく覆面せる数団の踊人（オドリコ）其の周囲に円陣或は縦陣を作りて一進一退数番の踊りをなす、各部落とも一個處若くは二個處の音頭場を設け、踊人は順次此を経巡る。天保年間の記録を見るに由良の盆踊りと題して扇踊及唱賀踊を載す。前者は其の品種七十餘にして一種毎に歌四五章あり、扇を閃かして身を左右に捻る。囃は太鼓のみなり、最も鄙びて観るに堪へざれども、この踊は鎌倉の草紙にもありと土人は誇れり、後者は内田村にも行はる、衆人同音にて諷ひつゝ踊る、金鼓の類を用ひず、囃なし、曲の終毎にションガエと言ふあり」。正岡憲三の絵を載せる。（写真10）当時の様子が絵入りでよくわかるが、最近まで（写真11）のように伏せた四斗樽の上に載って傘を差して音頭を取っていた。編笠と手拭いの頬被りで顔を隠すことから「かずき踊り」といわれた。由良には以下のように分かれそれぞれの箇所に音頭場を持つ。

南－えびす神社・横小路－吉田神社
中野－庚申様紺屋町－湊神社
四丁目－住吉神社・大川－クラブ
内田－内田神社

口説きは「八百屋お七」「鈴木主水」「南部坂雪の別れ」などで地の音頭につづいて江州音頭が入り、「ヤットセーヤットセード」の囃子言葉とともに複雑な足さばきになる。

（2011年調査）

＜南あわじ市沼島（ぬしま）＞

沼島は旧南淡町の土生（はぶ）港から南に４キロほどの海上にある島でかつては北前船の寄港地として、また参勤交代の際の宿泊地として栄え、遠隔地との交易を持った。

沼島は盆踊りの盛んなところで８月13日から17日の５日間、南区・北区・東区・泊区・中区と順を追って行われる。櫓が組まれ音頭をとる「音頭出し」が櫓にあがり傘をさして音頭を取る。太鼓の囃子がつく。周りに「馬」という涼み台を置く。踊り手は浴衣姿で女性は編笠の花笠を被る。花笠には幕があり降ろすと顔が隠れる。

沼島の口説きは「兵庫口説き」と言われ、沼島で伝承されているのは「さても助六」「毛谷村大助」「お千代常六」「千両幟」「道中づくし」「難波戦記」「阿波の十郎兵衛」「石堂丸」「黒土門兵衛」「近江八景」「葛葉の子別れ」「八百屋お七」「河内七回忌」「那須の与一」「赤穂浪士」「赤間ヶ関坊主おとし」「お舟しるし」「嫩（ふたば）軍記」「賽の河原」「えびや甚句」「白滝流し（山田の露）」「俊徳丸」「お梅伝次」「お仲清七」「丹波与作」他である[10]。

（2011年調査）

5、香川県

＜豊島家浦（てしまいえうら）＞

豊島は小豆島土庄町に属すが、岡山県玉野市宇部に近い。かつて産廃問題で報道された島だが、隣の直島とともに瀬戸内海芸術祭で賑わっている。この豊島は盆に傘を出す。豊島には家浦・唐櫃（からと）・甲生（こう）の三つの集落があり、家浦では８月13日、唐櫃14日、甲生15日に盆踊りがあり、家浦では傘を出す。櫓の音頭取りと太鼓の囃し手が上がる。（写真12）櫓には四つ竹が立てられている。以前は涼み台の上に立ち、四つ竹は立てなかった。踊りは男性が女性の恰好をし、女性が男性の恰好をして踊った。手拭で頬被りをするので誰か分からなかったという。口説きは「鈴木主水」「白井権八」「那須与一」など他に「島づくし数え歌」がある。　（2010年調査）

＜さぬき市津田＞

津田には「津田精霊踊り」があり、８月14日15日の盆の期間踊られる。岡の端・北山・津田で櫓を立てるが、岡の端では墓地の大師堂前でも行う。唄い手が番傘を手に持つ。踊り手の女性が男姿になるほか、頬被りをしている。昔は新仏の家は位牌をサラシにまいて背負った。音頭は「賽の河原」他即興の唄。

（2009年調査）

6、徳島県

＜徳島市阿波踊り＞

徳島市の阿波踊りの起源については諸説あるが、絵画資料として寛政10年（1798）と画讃に記されている鈴木芙蓉の描く「阿波盆踊り図」（写真13）が挙げられる。この絵は音頭出し（唄い手）と思われる一群と踊り手と思われる一群が分かれて描かれ音頭出しには傘が描かれている。現行の「ぞめき」のような前に進む踊りとは異なる。阿波踊りの成立には辻踊りから組踊りへ、組踊から俄踊り・ぞめき踊りと変容が言われている。辻踊りは精霊踊りとも言われ死者供養の輪踊りである。それが風流化され町々の派手な出し物の組踊りができ、それらを即興化した踊りが俄踊りで、それを町踊りとして前に進みながら踊るようになって阿波踊りの「ぞめき」ができた。寛政期（1789～1801）前後の文献では俄踊りと「ぞめき」の語が用いられているが[11)]、この期には「阿波盆踊り図」の絵にあるような辻踊りが残っていたといえよう。現在大桟敷で見せる阿波踊りの先頭に、この傘の出る阿波踊りを再現して踊ってみせる。

今まで見てきた傘を出す例では香川県津田の踊りがそれにあたるが、徳島市津田の「ぼに踊り」は、精霊を背負った踊り手が輪になって踊る。傘は出ない。

（2006年調査）

＜つるぎ町半田高清（こうせい）＞

つるぎ町は2005年に半田町・貞光町・一宇村が合併してできた。これに旧美馬町・脇町を加えた地区には「廻（まわ）り踊り」が分布している。四国には氏堂・辻堂・茶堂・四つ足堂などの三間四方の堂が各村落にあり巡礼の接待場であったが、お盆時に盆踊りが踊られることが多い。「廻り踊り」はお堂の中で踊ることが基本だが人数が多くなると外で踊る。ぐるぐると廻る様に踊るので「廻り踊り」という。旧半田町の元の高清小学校で踊られたのは櫓に傘を立て、その周りを廻る。（写真14）かつては堂内に立て臼を逆さにして、その上に立った。傘は唐傘であった。拍子木で拍子をとる所と、各人が下駄を履き下駄で拍子をとる所があった。頬被りをして踊る。

音頭は「繰り上げ音頭」とか「一口音頭」といって「音頭出し（唄い手）」が次々と変わっていく。古くは「浄瑠璃くずし」といって、人形浄瑠璃を題材にしたものが多かった。江戸時代も享保年間（1716～1736）頃から「のぞき」すなわち「のぞきからくり」が流行り、そこで扱われた心中ものや事件ものが主になった。のぞきからくりは七五調・二拍子で語られ、チャラチャン節といわれる。大正

時代になると浪曲の題材も入る。「浄瑠璃くずし」には「兵庫口説き」の影響もあったが、「チャラチャン節」になるとこの土地独自のものが増える[12)]。

「谷貞之丞物語」「於安御前由来記」がある。「谷貞之丞物語」は一宇村金村の一揆を扱ったもので、「於安御前由来記」は半田村の西久保地蔵堂の縁起で、お安という姫が、神木である大楠の御加護により難産の末出産し、安産の神となるという話である。他に「神崎与五郎東下り」「陰山長者乙姫」「太田の狸大統領為左衛門物語」など語り物の音頭がある。

（2007年調査）

一宇太刀之本（いちうたちのもと）の白地山地蔵寺では８月16日に廻り踊りがあり、四本の竹の櫓に赤い傘を立て、音頭出しが上がり音頭をとる。2004年より傘を復活した。　（2004年調査）

＜吉野川市美郷古井（こい）＞

７月７日旧美郷町古井の地蔵堂では堂内で音頭出しが番傘を差し扇子で拍子をとる。廻り踊りである。御祈祷踊りといい、「御祈祷、御祈祷」と言って踊る。踊り手は浴衣を着て鉢巻きを締め下駄をはく。神戸下駄という桐の下駄でカタンカタンと音を立てて拍子をとる。踊りは数歩前の進んでは二三歩下がる廻り踊りである。音頭は「石堂丸」他の「浄瑠璃くずし」である。昭和54年の『廻り踊り音頭集』には次のような題目がある。「京屋おすみ」「石堂丸」「阿波の鳴門」「おかん右兵衛」「影山長者の乙姫」「お亀源次」「おしょう亀松」「おかね浅二」

これとは別に８月18日に中村の寺で慰霊踊りがある。宗田（むねた）や谷（たに）でも堂内踊りがある。

（2005年調査）

＜つるぎ市貞光町木屋（こや）・川見＞

傘を出さないが堂内踊りの「廻り念仏」が旧貞光町木屋と川見にある。木屋では新仏のある年の８月13日大日堂で念仏踊りがある。新仏の位牌を前に地蔵・大日の真言を唱えたのち、「南無地蔵大菩薩」「ナムマミドーヤ」「カネタイコドーヤ」を十一回唱えながら、左廻りに後ずさりで廻り踊りを行い、だんだん速くなって終わる。下駄を履くことはない。

川見の川見堂では８月14日廻り踊りを堂内で行う。光明真言・十三仏真言を唱えながら左右の跳びながら廻り踊りをする。悪霊踊りといった。このあと清めの踊りがあった。[13)]　（2007年調査）

＜阿南市伊島＞

伊島は徳島県の最東端の紀伊水道にある島で伊島海士の潜水業で有名である。８月の盆にはタル踊りがある。音頭出しが四斗樽を伏せてその上に乗り、傘を手に上下に揺らしながら調子を取る。踊り手は手拭で姉さんかぶりをして、手にシブ団扇を持ち、下駄で調子を取りながら踊る。まず大屋・中屋・三間屋の草分けの三家を廻り、弘法大師堂・当所神社に行く。当所神社で踊るのは神踊りである。当所神社では９月10日に神社下の小学校のグラウンドで神踊りがある。

傘はでないが、伊島に近い旧由岐町伊座利（いざり）では７日から13日まで初盆の家を戸別にまわり、辻で輪になって踊った。14日・15日は寺踊りで、16日は神社で同じ踊りを宮踊りとして行う。宮踊りを神踊りともいう。音頭は「賽の河原」「坊主落とし」「山崎三太」という「兵庫口説き」が入っている。

旧由岐町志和岐は14日から16日までは荘厳寺で踊り、17日は観音堂で、18日は佐山上ヶ嶽の吉野神社で同じ踊りを踊る。「浄瑠璃くずし」で「巡礼おつる」「刈萱父子対面の場」「金色夜叉」などで、太鼓の音頭で音頭出しは四斗樽に乗った。傘は出ない。　（2006年調査）

＜牟岐（むぎ）町牟岐＞

徳島県の太平洋に臨む美波町（旧由良町・旧日和佐町）・牟岐町・海陽町（旧海南町・海部町・宍喰（ししくい）町）には「浄瑠璃くずし」の盆踊りがあり、宍喰町では傘を立てる。

牟岐町では傘は立てないが、幽霊踊り・慰霊踊りという牟岐音頭がある。舞台を組み、

大夫が上がり、太棹の三味線で浄瑠璃を語り、拍子木で台を打ちながら拍子をとる。踊り手は振袖姿で一文字笠をかぶり笠から引幕を垂らす。もしくは浴衣姿で布をかぶり、顔を隠す。（写真15）13日東の櫓辻・14日清水の光泉寺・15日西の牟岐小学校校庭で辻踊りを踊る。踊りは円になったり、並列になったりする。

音頭の浄瑠璃の芸題は「阿波の鳴門」「妹背山」「葛の葉」「三十三間堂柳の由来」「土橋」「吉野川」「三勝半七」「厨子王丸」「笠づくし」「宗元小春髪梳」「梅川忠兵衛」「忠七おかる」など十四種ある。このように浄瑠璃の芸題で踊るので「芸題踊り」ともいう。

（2005年調査）

＜徳島県のまとめ＞

以上徳島の盆踊りを見てきたが、由岐町伊座利の例にみるように

辻踊り（慰霊踊り）・寺踊り・宮踊り（神踊り）の三つがある。

基本は「廻り踊り」で輪になって行きつ、戻りつしながら踊る。堂内踊りと外踊りがあり、堂内踊りの場合、下駄で拍子をとる所がある。特に旧貞光町の木屋・川見の踊りは一遍上人の踊り屋の踊り念仏の形に近い。

旧半田市の「繰り上げ音頭」はのぞきからくりや浪曲の影響を受けて変化したものである。

音頭は人形浄瑠璃の芸題を崩した「浄瑠璃くずし」が主であるが牟岐町の幽霊踊りのように屋台を組み大夫さながらに語る。伊島のように「兵庫口説き」が入っているところがある。

7、新潟県

＜新潟市間瀬（まぜ）＞

最後に地区は外れるが新潟県新潟市間瀬の例を述べる、間瀬は弥彦山の北側の日本海に面した漁港であるが、間瀬大工として寺社の建築に携わる宮大工として遠隔地との交流がある。８月14日に行う。櫓を組み音頭取りはその上で唄うが、櫓には傘が立てられている。踊り手の女性は「タンゴ」を着る。振り袖で紺色の縁取りした厚手の着物で、京都府の丹後から日本海交易で伝わったといわれる。音頭は岩室甚句などの西蒲原甚句の系統で小唄として六十種ほどある[14]。間瀬・石瀬・和納と同じような音頭があるが傘を出すのは間瀬だけである。　（2017年調査）

8、伝播について

＜兵庫口説き＞

「兵庫口説き」は兵庫県の兵庫尻池村のお梅伝次郎心中事件や山田村の山田の露由来譚を題材にしたのが始まりといわれる。「山田の露」は山田庄野原の栗花落（つゆ）理左衛門と白滝姫の物語で「滝ながれ」ともいう。「兵庫口説き」は七七五調の歌詞を２～３頁にして心中物・地名由来・浄瑠璃のさわり部分などを版元が出版したものである。寄本式の単行本ではなく絵表紙付きの稽古本で一編ずつ出された[15]。（図２）享保年間（1716～37）から幕末から明治時代まで出版され大阪・兵庫・姫路などに20ほどの版元があった。音頭としては150種類くらいあったとされ、稀覯本として蒐集されている[16]。瀬戸内海に広がる盆踊りの多くが「兵庫口説き」の影響を受けている。「兵庫口説き」は姫路市・たつの市・赤穂市など兵庫県西部で盛んになった。太子町室津・赤穂市坂越（さこし）のような古い湊を起点に瀬戸内海に広まっていった。

姫路市網干では網干音頭・段文音頭と言われる音頭があり、今でも盛んであるが、これはのぞきからくりの七五調に文句を変えたものである。

坂越の「盆踊音頭」本には次のような音頭が載っている。「おなつ清十郎（白石踊音頭）」「赤間が関」「石堂丸」「さいの河原」「義士忠臣蔵」「鈴木主水」「平井権八」「関取千両幟」「助六あげ巻」「おしゅん伝兵衛」「ゑびや甚句」

図２　「兵庫口説き」本各種（村上省吾『兵庫口説』より）

「阿波の海賊」「那須の与市」「山田のつゆ」「阿波の鳴門」

この「兵庫口説き」は白石島に伝わっているが、いままで見てきたように各所に部分部分として伝わっている。

愛媛県松山市の青島は坂越の住民の移住したところで「忠臣蔵」「那須の与一」「丹波与作」「さいの河原「お半長衛門」「あげまき助六」「お夏清十郎」「加賀のお菊」「白石ばなし」「おはつ徳兵衛」「石堂丸」「安珍清姫」「阿波の母恋詩」「お伝十兵衛」「鎌倉山」があり[17]、傘を出す。

山口県周防大島町沖家室（おきかむろ）は周防大島の南端の集落でかつては家室千軒といわれたほど船舶の寄港地として栄え、朝鮮・台湾・ハワイへの移住者も多かった。盆に沈む村と言われる盆踊りが盛んで大太鼓を前に櫓を組み、音頭取りが口説きを歌う。傘は出さない。口説きは「白滝くどき」「梅治郎くどき」「石堂丸くどき」「お吉清佐くどき」「いろはくどき」「お艶成人くどき」「那須与一くどき」「山崎三太くどき」「お杉くどき」「お色十助くどき」「お梅源次くどき」「鈴木主水くどき」がある[18]。　　（2002年調査）

「兵庫口説き」地点別一覧表を表１、２に示す。瀬戸内海に島々に伝わっているのが分かる。さらにこれらの音頭は宮崎県延岡市島野浦や熊野江にまで伝わってこの両地区では傘を出す[19]。A「賽の河原」B「石堂丸」を基本とするが、「兵庫口説き」独特のC「山田の露」も広がりを持つ。赤穂市坂越を経由しているためO「忠臣蔵」が伝播するが，赤穂浪士の姿で踊る所は延岡近辺で多く、U「志賀団七」の団七踊りとも重なる。（符号は表１に表示）

題目は異なるが同じ内容なのは、「山田の露」と「白滝ながし」・「赤間ヶ関」と「坊主おとし」・「円正寺お杉」また「お梅伝次郎」が「お梅伝次」「お梅源次」等名前が変化して伝わっているものもある。

＜浄瑠璃くずし＞

これとは別に金毘羅宮の芝居や淡路島の人形浄瑠璃の有名な段を取り上げて作った「浄瑠璃くずし」がひろまっている。

徳島県海部町の浄瑠璃くずしの音頭本には「朝顔」「布引」「安達」「玉三」「児雷也」「腰越」「阿波鳴」「寺子屋」「寿司屋」「宗五郎」「御所桜」「柳のお柳」「谷三」「八陣」「孫一」「蝶花形」「兵衛門」「屋島」「日吉丸」「先代萩」「三勝」「壺阪」「鈴ヶ森」「時姫」など二十四種（題名は通称で、外題と段銘は表３の一覧を参照。）が書かれている。これらの「兵庫口説き」や「浄瑠璃くずし」は北前船の航路に沿って、日本海沿岸の湊や裏日本の山間部にまでひろがったと思われる。

＜傘と臼＞

ところどころに傘を出し、臼や四斗樽を逆さにしてその上に音頭取り（音頭出し）が立つのは古い形が残ったからと言えよう。臼は葬式に転がして再生を願うという儀礼があ

り、同様の儀礼的意味を盆の行事にあるとも考えられる。盆行事に出る傘は風流傘や傘ブクの連続性を一考する必要もある。音頭取りの傘が「兵庫口説き」や「浄瑠璃くずし」に伴って広まったとすると、「兵庫口説き」が出てくる享保年間（1716～37）以降のこととなる。説経節や祭文語りの影響も考えられる。多くは声の通りを良くするためといわれるが鳥取鹿野町の様にあえて破れ傘を差すところもあり、一概にはいえない。

音頭取りの傘は傘送りの伴うところが多く、音頭取りが傘を持つことに意味がある。傘を死霊の依り代とする説が考えられる。徳島県牟岐の幽霊踊りのように盆踊りで顔を隠すとか仮装・異装をするのは、この世の人でないことを表すという。

注

1）「遠賀川流域･玄海灘の傘を立てる盆踊り」『筑波学院紀要 No.13』2018年３月・「宇佐地域及び大分・宮崎県境の傘の出る盆踊り」『筑波学院紀要 No.14』2019年３月

2）傘ブク・吊り下げ物については以下の論考がある。段上達夫「きぬがさ１～３」『別府大学大学院紀要』No.13～15別府大学大学院2011～13・
坂本　要「傘ブクと吊り下げ物の民俗－傘ブクから雛の吊り下げ飾りへ」『福島の民俗』No.45福島県民俗学会2017
植木行宣「笠鉾とその流れ」『京都民俗』No.35京都民俗学会2017

3）祇園祭りの子どもの差し傘と吊り下げ物については坂本　要「祇園祭礼に見る稚児・傘・吊り下げ物」『東国の祇園祭礼－霞ヶ浦周辺地域を中心に－』岩田書院　2019

4）坂本　要「鶏足神社お浜降り遷宮祭（福島県南相馬市）」『まつり通信』No.594 まつり同好会　2018年３月

5）北尾泰志「鳥取県の盆踊り－東部地区を中心に－」『鳥取県立博物館研究紀要』No.31鳥取県立博物館1994

6）『里の響き』日貫郷土芸能保存会・日貫公民館1994
日貫については佐志原圭子「日貫聞書」『昔風と當世風』No.101古々路の会2016

7）『島根県の民俗芸能』島根県教育委員会1989

8）『落合町史　民俗編』落合町史編纂委員会1970

9）『岡山県笠岡市白石踊りの資料』笠岡市教育委員会1957に所載されている。

10）沼島壮年会『沼島物語』1970

11）「阿波盆踊り図」の分析は小川祐久「徳島城下の盆踊りを巡る言説と表象」『阿波踊り－歴史･文化・伝統－』阿波踊り」シンポジウム企画委員会2007三好照一郎「徳島城下盆踊りの絵画資料の研究」『阿波踊り史研究』徳島県教育印刷株式会社1998

12）『半田町の社会と文化－半田町地域調査報告－』徳島大学総合科学部行動科学教室社会学小田研究室1992

13）阿波の御堂の習俗研究会編『阿波の御堂－氏堂・辻堂・茶堂・四つ足堂－』徳島県出版文化協会1988

14）間瀬盆踊り保存会『間瀬・盆唄集』2007

15）藤田徳太郎「近代歌謡史略」『校註日本文学類従　近代歌謡集』博文館1929

16）村上省吾『兵庫口説』弓立社2009

17）青島の資料は筑波大学生柴原理那の調査報告による。

18）西村貞勝『沖家室の盆のくどきのまとめ』泊清寺　新島玄雄　1994

19）坂本　要「宇佐地域及び大分・宮崎県境の傘の出る盆踊り」『筑波学院紀要 No.14』2019

表１　「兵庫口説き」音頭地点別題目一覧

＜兵庫県洲本町由良＞
D「八百屋お七」G「鈴木主水」
「南部坂雪の別れ」「島づくし数え歌」

＜兵庫県南あわじ市沼島＞
A「賽の河原」B「石堂丸」C「白滝流し（山田の露）」D「八百屋お七」E「さても助六」F「赤間ヶ関坊主おとし」I「丹波与作」J「嫩軍記」L「那須の与一」M「阿波の十郎兵衛」N「お梅伝次」O「赤穂浪士」S「千両幟」T「えびや甚句」V「河内七回忌」
「毛谷村大助」「お千代常六」「道中づくし」「難波戦記」「黒土門兵衛」「近江八景」「葛葉の子別れ」「お舟しるし」「俊徳丸」「お仲清七」

＜徳島県阿南市伊島＞
A「賽の河原」F「坊主落とし」K「山崎三太」

＜兵庫県赤穂市坂越＞
A「さいの河原」B「石堂丸」C「山田のつゆ」E「助六あげ巻」F「赤間ヶ関」G「鈴木主水」H「平井権八」L「那須の与市」M「阿波の鳴門」O「義士忠臣蔵」R「おなつ清十郎（白石踊音頭）」S「関取千両幟」T「えびや甚句」
「阿波の海賊」「おしゅん伝兵衛」

＜香川県豊島家浦＞
G「鈴木主水」H「白井権八」L「那須与一」

＜香川県さぬき市津田＞
A「賽の河原」

＜岡山県笠岡市白石島＞
A「賽の河原」B「石堂丸」C「山田の露」E「揚巻助六」I「たんばよさく」L「那須の与一」M「阿波の鳴門」N「お梅伝治」P「加賀のお菊」Q「おはつ徳兵」R「お夏清十郎」V「七回忌」
「おはん長右衛門」

＜岡山県浅口市金光町佐方＞
B「石堂丸」D「八百屋お七」O「忠臣蔵討ち入りの段」
「絵本太功記尼崎の段」「義経千本桜」

＜愛媛県松山市青島＞
A「さいの河原」B「石堂丸」E「あげまき助六」I「丹波与作」L「那須の与一」M「阿波の母恋詩」O「忠臣蔵」P「加賀のお菊」Q「おはつ徳兵衛」U「白石ばなし」
「お半長衛門」「お夏清十郎」「安珍清姫」「鎌倉山」「お伝十兵衛」

＜山口県周防大島町沖家室＞
B「石堂丸くどき」C「白滝くどき」F「お杉くどき」G「鈴木主水くどき」K「山崎三太くどき」L「那須与一くどき」N「お梅源次くどき」
「梅治郎くどき」「お吉清佐くどき」「いろはくどき」「お艶成人くどき」」「お色十助くどき」

＜島根県邑智郡邑南町（旧石見町）日貫＞
C「おつや口説き」G「鈴木主水」H「平井権八」K「三さ口説き」U「志賀団七」
「お吉口説き」「教訓色は口説き」「中将姫雪責め口説き」「おせき口説き」「佐倉宗五郎」
「教訓色は口説き」「中将姫雪責め口説き」

＜鳥取県鳥取市青谷町山根＞
J「一の谷嫩軍記熊谷陣屋の段」

＜宮崎県延岡市島野浦＞
A「賽の川原」C「白瀧くどき」D「八百屋お七」H「白井権八」K「大和三太」M「阿波の鳴門」U「白石くどき」
「お為半蔵」「信濃屋お信」「お艶くどき」「牡丹長者」

＜宮崎県延岡市熊野江＞
A「賽の川原」I「丹波与作」J「一の谷」U「志賀団七」
「炭焼き小五郎」「稲葉小僧」「留吉くどき」

共通する音頭の符号

A「賽の河原」B「石堂丸」C「白滝流し（山田の露）」D「八百屋お七」E「助六」F「赤間ヶ関坊主おとし」G「鈴木主水」H「白井権八」I「丹波与作」J「嫩軍記」K「三太口説き」L「那須の与一」M「阿波の鳴門」N「お梅伝次」O「赤穂浪士」N「お梅伝治」P「加賀のお菊」Q「おはつ徳兵」R「お夏清十郎」S「関取千両幟」T「えびや甚句」U「志賀団七」V「河内七回忌」　※（符号なしは共通音頭なし）

表２　「兵庫口説き」地点別一覧表

地名	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V
兵庫県洲本町由良				○			○															
兵庫県南あわじ市沼島	○	○	○	○	○	○			○	○		○	○	○	○				○	○	○	○
徳島県阿南市伊島	○					○					○											
兵庫県赤穂市坂越	○	○	○		○	○	○	○				○	○		○			○	○	○		
香川県豊島家浦							○	○				○										
香川県さぬき市津田	○																					
岡山県笠岡市白石島	○	○	○		○				○			○	○	○		○	○	○				○
岡山県浅口市金光町佐方		○		○											○							
愛媛県松山市青島	○	○			○				○			○	○		○	○	○				○	
山口県周防大島町沖家室		○	○			○	○				○	○		○								
島根県邑南町日貫			○				○	○			○										○	
鳥取市青谷町山根										○												
宮崎県延岡市島野浦	○		○	○				○		○		○									○	
宮崎県延岡市熊野江	○								○	○											○	

符号は表１下覧に表示

表３　徳島県海南町　海部踊り浄瑠璃くずし外題一覧

通称	外題	段	段名
朝顔	朝顔日記	増補	宿屋の段
布引	源平布引滝	増四段	松波琵琶の段
安達	奥州安達ケ原	二段目	袖萩祭文の段
玉三	玉藻前旭の袂	三段目	道春館の段
児雷也	児雷也物語	八ツ目	児雷也住家の段
腰越状	義経腰越状	三ノ切	泉ノ三郎館の段
阿波鳴	傾城阿波の鳴門	八段目	巡礼歌の段
寺子屋	菅原伝授手習鑑	四段目	手習児屋の段
寿司屋	義経千本桜	三ノ切	鮨鮎屋の段
宗五	色雲佐倉曙		儀作切腹の段
御所桜	御所桜堀川夜討	三ノ切	弁慶上使の段
柳Ａ	三十三間堂棟木の由来	三ノ切	平太郎内の段
柳Ｂ	再版祇園女御	三段目	お柳別れの段
谷三	一ノ谷嫩軍記	三ノ切	熊谷陣屋の段
八陣	八陣守護城	八ツ目	朝清本城の段
孫一	太功記	六段目	六日の段
蝶花形	蝶花形名歌嶋台	八ツ目	小坂部館の段
兵衛門	忠臣二度目清書		兵衛門切腹の段
屋島	弓勢屋島合戦	三段目	五平治左衛門住家の段
日吉	日吉丸稚桜	三段目	五郎助住家の段
先代萩	伽羅先代萩	六段目	政岡忠義の段
三勝	艶姿女舞衣	増補下段	酒屋の段
壺坂	世三所花ノ山壺坂霊験記		壺阪の段
鈴ヶ森	恋娘昔八丈	五段目	鈴ヶ森の段
時姫	鎌倉三代記	第七段	三浦別の段

宇曽野天九郎編『改定増補音頭文句集（ガリ版刷り）』昭和56年（1981）より作成

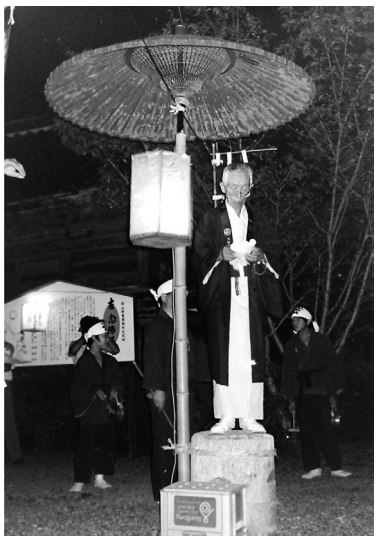
1、鳥取市青谷町山根厳正寺１

2、鳥取市青谷町山根厳正寺２

4、はねそ踊り　鳥取市青谷町早牛（1963）

3、鳥取市鹿野町河内（破れ傘）

5、島根県邑南町日貫宝光寺

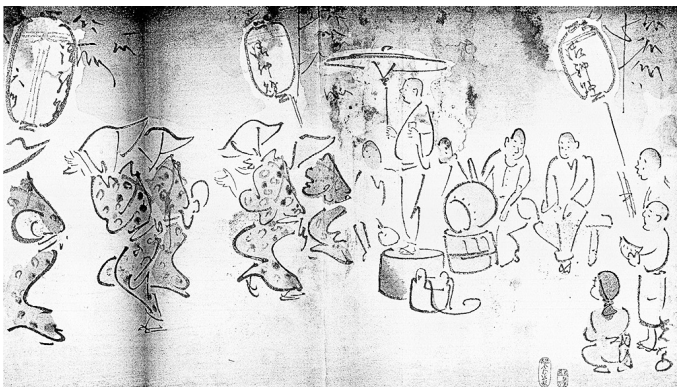


6、岡山県落合町吉の念仏踊り1（大傘と読み手）

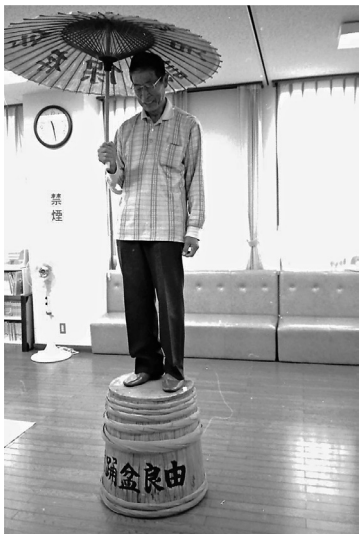
7、岡山県落合町吉の念仏踊り2（サイハラ）

8、岡山県金光町吉のひがさき踊り（一畳台）

9、岡山県笠岡市白石島白石踊り（観光絵葉書より）



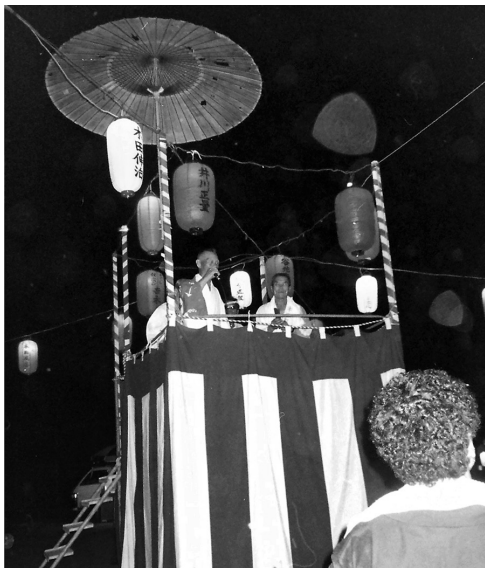
10、淡路島由良の盆踊り『由良志稿』（大正３年・1922）



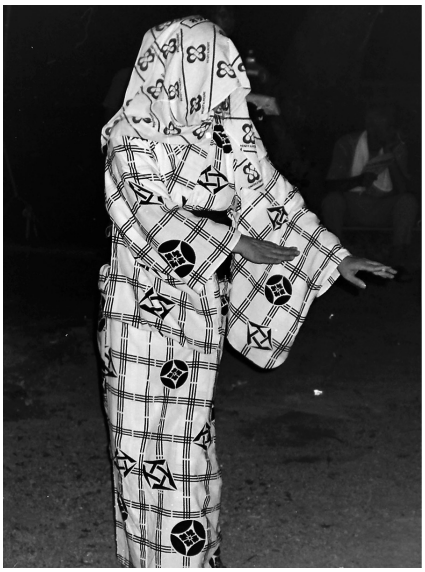
11、兵庫県洲本市由良

12、香川県豊島の傘（音頭取りと太鼓の囃し手）

13、阿波盆踊り図（寛政 10 年・1798 鈴木芙蓉画）



14、徳島県半田の廻り踊り



15、徳島県牟岐の幽霊踊り